



「変わり者かあちゃんと偏屈おやじ」

ほ の ま こ
細野 松子

1937年(昭和12年)
江戸川区長島
(現東葛西)生まれ
東葛西在住



■ 教員のむすめ

祖母が父を連れて故郷の秋田県から東京に出て、葛西の長島に住み教員をしていました。父も師範学校を出て教員になり、葛西で教えていました。母も教員でした。

わたしは長島で生まれて、7歳まで住んでいました。第二葛西小学校に通い、戦争末期に二番目の兄と一緒に山形県の鼠ヶ関に学童疎開しました。2年生の時で、3月の大空襲の跡を錦糸町だったか亀戸だったか、みんなで駅まで歩きました。焼く野原、ほんとに障害物がないのです。白いコンクリートのがれき、むきだしの鉄骨を覚えています。

わたしたちの学校は、疎開先の海の近くの旅館に20人くらい。兄がいちばん上だったかな。校長先生が付いていらした。食事は汁ものが多かったかな。地元の小学校には行かなかったような、宿でも勉強をした記憶がない。旅館の廊下が暗くて長くて夜中にトイレに行くのが怖かった。いつも兄を起こして付いていってもらいました。兄が一緒だったからさびしくなかった。着ている服の縫い目に沿ってびっしりとシラミが。血を吸っているから黒い。刺されたところが海水浴のときビリビリ痛かった。

男の子たちはお腹がすいてすいて。お盆のときに土地の人がなんか供えるでしょ。次兄は横から供え物に手を伸ばして「おまえ、腹減っているのはわかるけど拝み終わってから取れよ」って土地の人に叱られて。そのくらい食べ物がないのよね。

両親、祖母、兄、妹と弟が群馬県の祖馬島というところに疎開していたの。終戦で、9月に疎開先から親元に行きました。家族で群馬に疎開していても疎開者は食べ物がないかな手に入らなくて。お芋やなんか、さつまいも、あれだって戦後はしばらくなかったのですよ。母は着物と食べ物を交換するとかね。

群馬で小学校時代を過ごし、その後東京に。東長崎(豊島区)の叔母の家に両親ときょうだい一家7人が身を寄せました。豊島区の中学校に入学して楽しい中学生活だった。あれはなんだったのでしょうかね、女の子も男の子も一緒に夢中になって遊びました。卒業してからも旅行した

りしてね。

父は終戦間際に教員を辞めたのですよ。母も。戦争中は一生懸命やったのにすっかり周りが様変わりしたので、教員を続けていく気がおきなくて。それで学校給食が始まると学校に食材を納める商売をはじめました。わたしも会社を辞めて結婚するまで父と一緒に働きました。両親は同じ年で、ふたりとも97歳で亡くなりました。わたしは5人きょうだいです。兄がふたり、それと妹と弟がいます。どれも教員にはなりませんでした。

今は東葛西に住んでいます。夫と息子と猫と。夫は看板彫刻師。木製の看板を彫る職人です。独立して「工房まちなす」を開き、「店、ここに出したんだよ」というのがここです。材料を仕入れる関係で、木場に近いこの葛西に。はたちのとき絵画教室で知り合ってずうっと付き合っていて、「早いとこ決めてくれよ」と32歳で結婚し、生まれたところに帰ってきました。偶然ですよ。夫は「あんたシャケみたいな人だね」と。

■ 絵と文と

都立豊島高校を卒業して会社に1年半くらい勤めたのかな。わたし勤め人ってできないの。駅まで行くでしょ。ああ今日は会社行くのいやだなんて帰ってきちゃうのね。電車に乗るのがいやとかじゃなく、会社で座って何かやるのがね。

絵を描いたり文を作ったりが好きだったの。わたしが言いだしっぺになって絵のサークルをつくったのね。あれはデザイン部だったか。教科書会社だからそういう部署があったのですよ。芸大出の人がレイアウトやっていて、絵のことも教えられる人がいました。その人に講師をお願いして。

会社を辞めたあと、絵のサークルには行っていたの。夜ね。1週間に1度。それは随分続いたのですよ。50年。5、6年前まで。すごいでしょ。メンバーも途中から入った人もいるけど、最初から変わらない人も3人いました。どうかすると絵を描いているんだかおしゃべりしてんだかわからないような時もあったけど。いま思えば素晴らしい仲間だった。

展示会ね、仲間たちと10回ぐらいいやりました。ある程度

作品がたまったら、まず会場を借りるの。講師に並べ方みたいなのを教わって、誰その作品は目立つところにか。でもお金がかかるのよね。

わたしの場合は具象かな。セッティングして考えて。風景は描いたりしたけど外に出ていくとなると、家庭があるとなかなか大変なのよね。だから、まあ、家の二階のアトリエで描く。サークルでも夕方から描くからどうしても静物画。花とか。ただ好きで絵を描いたり文を書いたり夢中になってやっていると一日がもうあっという間に過ぎてしまう。

何か自分を表現したいという思いがあって、エッセイと絵を組み合わせる本にしたいなって思っていたのね。画文集。2001年、たしか63歳だった。うちお金ないし地元の信用金庫に行って「わたし本出したいからお金貸してよ」と。あんまりしつこく言うものだからとうとう根負けして貸してくれた。

「あなたの本を出しますよ」という会社の作品募集にね、原稿送って本にしてもらいました。毎月だったか、本にした中から8冊選んで、かなり大きく朝日新聞で宣伝してくれたの。絵と文というのがインパクトあったみたい。応募する前に下の息子がずいぶんアドバイスしてくれたのね。編集が好きでいま出版社で編集の仕事をしています。1000部くらい刷ったかな。葛西の書店に置いてもらって400部売ってくれましたよ。地元はありがたいわね。



◆ほそのまつこ画文集

隅でクリーニングの取次店を開いたりいろいろやりくりはしたのですが、記憶がないのね。上の息子が「かあさんの脳みそはバラ色だな」とからかうの。下の息子は「とうさんも変わり者だけれどかあさんはもっと変わり者」と。

職人に限らず音楽家でも絵描きでも会社経営者でも、男性には内助の功、奥さんの支えがあると思うの。そういう意味ではわたしね、もしかすると職人の偏屈おやじにふさわしいかあちゃんじゃないかと自画自賛しています。まあ、とにかく不景気で大変なのだけれど。やはり、旦那は彫ること、手を動かすことが好きなのだ。だからそういう姿を見て偏屈おやじとかなんとか言うけれど、こういうのがまあいいかなと思っているわけ。

それとね、絵を描くところで知り合って結婚して、それからわたしは絵のサークルに行っていた。旦那は彫る仕事をしないと生活が成り立たない。子どもが生まれて、それでもわたしは絵のサークルにずうっと行っていた。わたしが行っているときは子どものオムツを替えてくれていた。むこうもきっと何かに夢中になるタイプが好きだったのかも知れない。だから今度は自分が支えに、支えというも変だけれど、まあ、「できることはやるか」と。

絵と怪獣たち

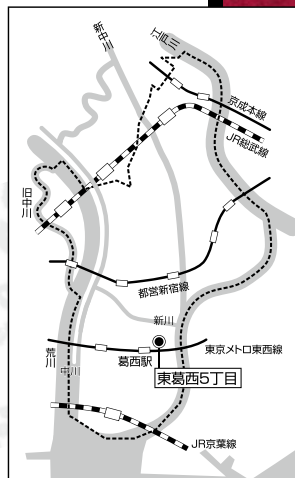
絵は今でも描いていますよ。大きいものは体力的にむりだけれど小さいものを。描いた絵はすべて持っています。自分の手から放せない。気に入らなければ直したり壊したりもします。

ハクビシン見ました。あの3月11日に。東西線のガードの脇から出てきたの。地震怖かったのね。ハクビシンって雄猫の大きさぐらい。尻尾がふさふさして鼻筋がスーッと白い。陶芸仲間は清新町の緑道を散歩していると「出てくる」って。わからない人はネコの大きいのかなんて思うかも。

陶芸は気持ちに余裕が出るのね。始めてからまだ4、5年ですかね。おもしろいですよ。区の施設の教室で基礎を習いました。すごくいい先生。「あしなさい。こうしなさい。」というのがないのね。今はその先生の陶芸サークルで怪獣と花瓶を作っています。サークルではロクロを回す人もいたし、それから麵棒で平らに伸ばして何かの型に押しして作る人もいるの。その時の気分で見え勝手なやり方をしている。わたしは「手びねり」。土を手でひねって作る。いろいろな怪獣をいっぱいね。楽しいわよ。



◆サークルでの細野さん



希少動物というのかな

1970年に結婚してここに来たばかりの頃、葛西駅に行く途中に水路があったのね。両脇は田んぼ、蓮田が。白鷺がいたの。嘴でエビガニをひゅうひゅうと飲みこんじゃうの。駅の手前には山西牧場があった。乳牛がいたのですよ。この土地に古くからいる人は知っている。コウモリもいた。スズメは少なくなった。チュンチュン鳴いていたのに。

うちのとうちゃんは江戸川区の伝統工芸の会員。けっこう有名で取材されたりテレビにも出ている。今ね、ああいう仕事続けている人がいないのですよ。希少動物。弟子も取らない。息子たちにも継がせない。食べていけないから。

結婚した頃からすごく忙しかったのね。紙を貼るとかわたしも手伝いましたよ。子どもが生まれるまでだけれど。パブルがはじけると注文が少なくなって食べていくのが大変に。工房の

- ◆インタビュー／2014年3月
2015年9月
- ◆聞き手／村田正子 小宮和子 吉野治子
- ◆コーディネーター／樋口政則